

## 虫に食べられたの？

柔軟で素直な子どもたちは、自然を身近に感じ、遊びや生活に取り入れることができます。

例えば子どもが飼育栽培を始めると、毎日のように観察し、「明日はどうなるかな？」と楽しみにする姿が現れます。また、予想や期待により生じる疑問や不安を感じることをきっかけに、確かめたり問題を解決しようとしたりする子どもの姿から「科学する心」が見えてきます。

## 子ども（5歳児）

## 二本松市立川崎幼稚園

入園前まで、子どもたちは自然に関わる体験が極めて少なかった。その実態を踏まえ保育者は、保護者や地域の方々の理解や協力のもと、子どもたちが栽培活動を楽しめるようにしたいという願いをもった。そこで子どもを取り巻く大人みんなが集まれる機会に、子どもと大人と一緒に花壇を作る場面を設けた。その後、子どもたちは栽培物や生き物に心を寄せ、様々な体験をした。

## 事例1【アサガオの芽を毛虫から守ろう】

4月

種まきをして数日後、ヒマワリ、ホウセンカ、アサガオなどが次々に芽を出した。登園後すぐに見に行っていた子どもたちは喜び、毎日、覗き込むようにして観察するようになった。

**《きっかけ》芽を食べているアメシロ（アメリカシロヒトリ）を見付ける。**

毛虫を見つけたAさんは「お家に帰るんだよ」と言い、シャベルに載せてフェンスの外に逃がした。保育者が見守っていると、他の子どもたちも、シャベルで逃がしていた。ところが、地域で大発生していたので、繰り返し逃がしても毛虫は出てくる。

「なかなか、いなくならないな」「芽がなくなっちゃうよ」「どうやって助ける」とみんなが集まり相談を始める。

良い考えが浮かばず、次々に来る毛虫を見て諦める様子が見られる中、BさんCさんは園庭を見て回っている。そして、チューリップには毛虫がいないことに気付く。

**BさんCさんは、「先生、チューリップの葉っぱには、アメシロはいなかったよ。だからこの葉っぱを敷けばいいんじゃない？」**と言い、虫が来ないように、チューリップの葉を芽の周りに敷き詰める。



## 事例2【お米をなんとかしたい】

9月

栽培活動を楽しむ体験を重ねていた子どもたちは、稲作では稲の生長や田んぼに逃がしたオタマジャクシの成長を楽しみ、毎日の世話や観察をしていた。

夏季休業明けの9月始め、順調に育っていることを楽しみにして、田んぼを見に行く。

**《きっかけ》**

**穂の一部が白くなって米粒がなくなっている箇所を見付ける。**

「何だこれ？ここだけ白くなっているよ」「虫が食べたのかな？」「病気かな？前のさくらさんの時は病気じゃなかった？」と心配して話し合う。しかし、調べても理由や解決策は分からない。

稲作指導をしてくださる地域のDさんに相談する。詳しく調べたことを話していただき、スズメに食べられていたことが分かる。

子どもたちはDさんが田んぼに作ってくださった**スズメ除けの囲いに、自分たちでキラキラテープを付ける。**



**【考察】** 子どもたちは、自ら栽培物に起こった異変を見付けて関わっている。そして、自分たちの問題として、栽培物を毛虫や鳥から守る行動を起こしている。このような気付いたことや異変を伝え合う友達との関わりや毎朝重ねている観察は、見つけた問題を乗り越えようとする要因やきっかけになっている。「栽培物への興味の深さ」「生長への期待の高さ」が行動に結び付き「科学する心」が育まれている。

子どもが自分たちで園生活を展開できるように、保育者は園内の自然環境、物的環境、人的環境の工夫や改善を折々に図る必要があります。特に、飼育栽培に関する自然環境は、年間を通した見通しと、適時の工夫や配慮が必要です。その見通しや適時の工夫を子どもと考え合うことができると、「科学する心」が育まれるきっかけを、年間を通して日々掴むことが期待できます。

## 保育者（子どもたちの発想や考えが活きる）

二本松市立川崎幼稚園

自然体験の少ない子どもたちの実態を考慮し、子どもたちが栽培活動を通して、友達と一緒に気付いたり、発見したり、疑問に感じたりする体験に注目した。「自然体験を通して感じたり考えたりしたことを表現する活動を重ねる保育により、子どもたちには豊かな感性が生まれ『科学する心を育てる』ことに結び付くであろう」と、保育者は見通しをもち取り組んだ。

### 体制づくり 保護者や地域の人との連携

- 園庭に畑を作って野菜を栽培し、保護者や地域の方々と一緒に収穫祭をすることを職員間で話し合う。
- 地域の小学校長や住民センター所長はじめ、地域の方に、園の除染が完了し、土や肥料を入れて栽培活動をするなどを伝える。保護者や地域の方から同意や理解を得る。
- 耕地や栽培物の計画を立て、保護者や地域の方の協力がいただけるように話し合う。

### 工夫1 地域の方と園全員で耕地 ⇒後の連携、協りに結び付く※

- 子どもたちは、自分の祖父母からイメージした“野菜作りの名人”との栽培活動に期待が膨らむ。
- 家庭で、園での出来事が話題になる。孫の話しを聞いて情報や援助をくださる祖父母の姿がある。
- 地域の方は、毛虫の大量発生など園で困っていることを知ると、気にかけて助けてくださる。



※収穫したフウセンカズラの種を地域に配る。種を知った地域の方が、「“さるぼぼ人形”ができるこの種を探していた」と来園し、子どもたちに作ってくださる。子どもたちは、地域の方の愛情や有能感を感じる。また、自然物の特徴を活かした創作活動の刺激になる。

### 工夫2 子どもの思いや考えを共有 ⇒大人には予想外の思いや考えが引き出される

地域で毛虫が大量発生し、周囲の大人は毛虫を潰していた。その姿を見ている子どもたちだが、毛虫からアサガオを守るために、シャベルですくい逃がしていた。逃がす作業が追い付かなくなり、自分たちで話し合っても解決策が見えない。諦める友達がいる中、園庭をよく観察し、栽培物にいる毛虫の有無を見分けて対策を考える子どもがいた。 (P.6 事例1)

その体験は稲の問題でも自分たちで考え合う姿に繋がった。子どもの声でDさんの援助を受けて稲を守り、スズメ除けにテープを付けるという「自分たちにもできることが見付かる」解決に結び付いた。(P.6 事例2)

### 工夫3 自然体験でできる予想を活かす ⇒変化や生長を予想したり期待したりする 自分のできることを考え実行する

種まきの経験がなかった子どもたちが、家庭や地域の人との関わりにより、美味しい野菜を育てるために畑を耕すことや毎日世話をすることを知り、栽培活動当初から喜んで活動している。小さな種から芽が出て、花や実を付け、収穫を期待しているからこそ、観察をして栽培物の異変に気付いている。生長のためにできることを考えて行動している。 (P.6 事例1、2)

**【考察】** 子どもたちは、栽培活動を通して自然や生き物についても学ぶ体験をしている。その体験は次の栽培活動に繋がり「科学する心」が育まれる体験が深まっている。子どもが感じたり気付いたりする場面を保育者が見逃さず寄り添うことで、自ら問題解決や新たな発見をする体験を重ねていくことができる。